

「赤ちゃん訪問」の回数増



生後4カ月未満の乳児がいる全家庭を保健師らが訪ねる、国の「こんにちは赤ちゃん訪問(乳児家庭全戸訪問)」事業。大府市は本年度から、生後8カ月ごろにも全戸を再訪する取り組みを独自に始めた。育児の悩みを伝えやすい産後の母親や、子どもの成長を切れ目なく支援する狙いがある。
(望月海希)

5月上旬、第1子の育児を育てる30代夫婦のもとを市の保健師が訪ねた。15分ほどの滞在で、体の成長や

ちた特報
ニュースのつぼ

生後8ヵ月にも 大府市、切れ目なく支援へ

離乳食の進み具合を確認。帰際には、プレセントとして紙おむつ1パックを手渡した。

母親は「1人目だし、大きくなってきたからその不安もある。集団だと周囲を気にして聞けないが、家に来て親身に相談に乗ってくれるのはありがたい」と安堵の表情を浮かべた。

生後4カ月未満の全戸訪問は、児童福祉法に基づき各自自治体で取り組む。保健師や助産師、看護師のほか、子育て経験があるボランティアらに委嘱する例もある。市によると、この事業で、専門職が複数回、家庭を訪れる自治体は多くないという。

困りごと多い時期

妊産婦支援に詳しい日本福祉大看護学部・岡田由香教授(生涯発達看護学)の話。産後8カ月ごろに親が抱えやすい困りごとは、離乳食をどのように進めて授乳を終えるか、社会性の発達に伴う「人見知り」にどう対応するかなどがある。

また、共働きの夫婦にとっては、保育園探しなど育児休業明けの準備を進める期間で

背景には、若い世代の転入が目立つ大府市ならではの地域性もある。市健康増進課の担当者は「第1子の場合は特に、どこで、どう

いう支援を受けられるか把握できていない人もいます」と懸念する。生後8カ月は、市が生後4、10カ月に実施する乳幼児健診の合間。「健診の間に保護者とかかわって育児の状況や困り感を聞くことができれば」と話す。

離乳食の量が増えたり、運動機能の発達が見られたりする時期とも重なる。「自分の育児が正しいのか不安に感じる人もいます。相談してもらい、孤立を防ぐことにもつながりたい」

もある。

行政からは、孤立を防ぐための交流会や情報の提供、育てにくさを少しでも感じている親への継続した個別フォローがあるのが理想だ。

専門職の保健師が訪問し、日常生活の観察から問題を早期発見できること、さまざまな背景に応じた子育ての指導ができること、育てにくさを感じている親へのフォローを継続的に行えることには意義がある。